

熊本縣八代郡鏡町大字鏡村居住平民東京府麴町區三番町寄留新聞記者

菊池謙讓

明治三十年十月生

同縣宇土郡宇土町大字宇土居住士族新聞記者

佐々木正

明治六年二月生

福岡縣山本郡草野町大字草野居住平民無職業武田範之事

武田範治

文久三年十一月生

熊本縣下益城郡海東村大字南海東居住平民農業

前田俊藏

明治七年十二月生

同縣阿蘇郡宮地村居住士族無職業

家入嘉吉

明治十年四月生

同縣熊本市長安寺町居住士族新聞社員

牛島英雄

明治六年十月生

同縣阿蘇郡內牧村大字內牧居住士族朝鮮國桂洞小學校教員

松村辰喜

明治九年十二月生

京都府京都市下京區東枳殼馬場七條上ル三丁目若松町居住平民無職業

鈴木順見

明治元年九月生

熊本縣熊本市北坪井町居住士族新聞記者

小早川秀雄

明治三年三月生

同縣飽託郡廣畑村大字保田窪居住士族雜貨商

中村楯雄

文久三年四月生

神奈川縣愛甲郡荻野村大字下荻野居住難波惣平弟平民藥品雜貨行商

難波春吉

元治元年四月生



熊本縣山鹿郡中富村大字下分田居住士族農業

佐藤敬太

安政五年十二月生

同縣球摩郡岡原村大字岡本居住平民農業

田中賢道

安政三年十月生

同縣山本郡田底村大字米塚居住士族新聞記者

平山勝熊

慶應三年四月生

東京府東京市小石川區中富坂町居住華族豫備陸軍中將正三位勳一等子爵

三浦梧樓

弘化三年十一月生

同府同市四谷區四谷須賀町居住平民公使館一等書記官正六位

杉村濬

嘉永元年正月生

新潟縣古志郡長岡本町大字東神田町居住士族領事館補從七位

長野縣北佐久郡小諸町居住平民外務省警部

堀口九萬一

慶應元年正月生

東京府東京市淺草區聖天町居住平民外務省巡查

萩原秀次郎

慶應二年四月生

鹿兒島縣日置郡日置村居住士族外務省巡查

渡邊鷹次郎

嘉永四年十一月生

長崎縣長崎市今籠町居住士族外務省巡查

成相喜四郎

元治元年七月生

鹿兒島縣鹿兒島市塩屋村居住外務省巡查

横尾勇太郎

慶應二年五月生

小田俊丸

文久元年十一月生



同縣同市西田町居住士族外務省巡查

木脇祐則

明治五年三月生

長崎縣南高來郡神代村居住士族境勘作長男外務省巡查

境益太郎

明治元年九月生

鹿兒島縣鹿兒島市冷水通町居住士族外務省巡查

白石由太郎

明治四年十一月生

神奈川縣橫濱市相生町六丁目居住士族賣藥商高橋源次事

寺崎泰吉

文久二年二月生

長崎縣下縣郡久田道町居住士族朝鮮國補佐官勳七等

淺山顯藏

嘉永二年四月生

熊本縣飽託郡力合村大字島新居住士族新聞記者

安達謙藏

福岡縣河沼郡金上村大字福原居住士族佐瀨緣藏養嗣子醫業

元治元年十月生

佐瀨熊藏

慶應元年十二月生

熊本縣飽託郡奧古閑村居住平民非職營林主事朝鮮國內部顧問官

澁谷加藤次

安政二年三月生

長崎縣下縣郡宮谷町居住士族朝鮮國通譯官大浦滋彥事

大浦茂彥

萬延元年六月生

滋賀縣東淺井郡大郷村大字難波居住平民蓮本安丸又蓮元康丸事

蓮本泰丸

慶應二年七月生

新潟縣中頸城郡高城村大字木築居住士族晒業勳七等

鈴木重元

嘉永六年二月生

熊本縣熊本市小幡町居住士族宮住守男次男新聞社員宮住勇記事



明治六年二月生

右岡本柳之助外四十七名ニ對スル謀殺及兇徒聚衆事件平山岩彦ニ對スル故殺事件等檢事ノ請求ニ依リ豫審ヲ遂ル處

被告三浦梧樓ハ朝鮮國駐劄特命全權公使トナリ明治二十八年九月一日京城ニ就任セシ處當時同國ノ形勢漸ク否運ニ傾キ宮中ノ專横日ニ甚シク妄ニ國政ニ干涉シ我政府ノ啓誘ニ因リ稍ク改良ノ緒ニ就キタル政憲ヲ紊リ遂ニ我陸軍士官ノ盡力ニ成レル訓練隊ヲ解散シ其士官ヲ黜罰セントスル等頗ル我國ヲ疎外スルノ形跡アルノミナラズ、國政ノ進歩ヲ圖リ獨立ノ實ヲ舉グルニ銳意ナル内閣員等ヲ免黜又ハ殺戮シ以テ政權ヲ宮中ニ收メントスルガ如キ計畫アリト聞キ憤慨措ク能ハズ是レ多年我國ノ勞力ト資財トヲ費シ同國ノ爲メ經營セル好意ニ負キ内政ノ改良ヲ妨グ國家獨立ノ基礎ヲ危クスル者ニシテ獨リ同國ニ不利ナルノミナラズ、我帝國モ亦害ヲ受クル尠カラズ依テ速ニ其弊害ヲ除キ彼レノ獨立ヲ扶植シ併テ同國ニ於ケル我國ノ威信ヲ保持セザル可ラズト考慮スル折柄會々大院君時弊ヲ憤慨シ自ラ起テ宮中ヲ革新シ補翼ノ任ヲ盡サント欲スルノ意ヲ致シ陰ニ助力ヲ求メ來リタルヨリ同年十

月三日被告杉村濬岡本柳之助ト公使館ニ會シ三名謀議ノ上常ニ宮中ノ爲メニ忌マレ自ラ危ム所ノ訓練隊ト時勢ヲ慷慨スル壯士輩ヲ利用シ暗ニ我京城ノ守備隊モ之ニ聲援セシメ以テ大院君ノ入闕ヲ援ケ其機ニ乗ジ宮中ニ在テ最モ權勢ヲ擅ニスル王后陛下ヲ殲サント決意シタリ然レドモ大院君他日若シ政治ニ容喙セバ其弊害却テ前日ヨリ甚シキモノアラン事ヲ慮リ豫メ之ヲ防ガザル可カラズト爲シ被告濬ハ要項四ト題スル約款ヲ起草シ被告柳之助ハ大院君ト親善ナルヲ以テ之ヲ携ヘ同月五日孔德里ノ別邸ニ赴キ方今形勢再ビ太公ヲ煩スモノアラン、而シテ三浦公使ノ要ムル所如此ト該書ヲ相示シタルニ大院君ハ子孫ト共ニ欣然トシテ之ヲ諾シ自ラ誓約書ヲ裁シタリ依テ被告梧樓等ハ其時期ヲ同月中旬ト豫定シ柳之助ガ孔德里ニ到リタルハ他ノ疑ヲ惹キ事ノ露顯スベキ恐アレバ畢竟歸國ノ告別ニ過ギザリシ事ヲ表センタメ仁川ニ下ラシメ被告柳之助ハ翌六日京城ヲ出發シタリ然ルニ同月七日軍部大臣安馴壽宮中ノ使命ヲ帶ビ來テ訓練隊解散ノ事ヲ告ゲ公使ノ意見ヲ要メタルヨリ時機既ニ切迫シ一日モ猶豫シ難キヲ以テ被告梧樓被告濬ハ協議ノ上同夜事ヲ舉グルニ決シ直ニ電信ヲ以テ柳之助ノ歸京ヲ促シ一面ハ被告堀口九萬一ニ大院君入闕ニ關スル方略書ヲ授ケ柳之助ヲ龍山ニ待受ケ共ニ入闕スベキ事ヲ命ジ尙被告梧樓



ハ京城守備隊ノ大隊長馬屋原務本ニ訓練隊ヲ操縦シ且守備隊ヲシテ之ニ聲援セシメ大院君ノ入闕ヲ容易ナラシムベキ諸般ノ指揮ヲ命ジ又被告安達謙藏國友重章ヲ公使館ニ招致シ其知人ヲ糾合シテ龍山ニ柳之助ト會シ共ニ大院君入闕ノ護衛ヲナス可キ事ヲ委囑シ且當國二十年來ノ禍根ヲ絶ツハ實ニ此一舉ニアリトノ決意ヲ示シ、入闕ノ際王后陛下ヲ殺害スベキ旨ヲ教唆シ被告荻原秀次郎ニハ部下ノ巡查ヲ引率シ龍山ニ到リ柳之助ト協議シ大院君ノ入闕ニ付盡カスベキ旨ヲ命ジ而シテ被告濬モ亦被告鈴木重元淺山顯藏ヲ招キ大院君入闕ノ事ヲ告ゲ重元ニハ通辯ノ爲メ被告鈴木順見ヲ龍山ニ遣ス事顯藏ニハ豫テ大院君ノ入闕ヲ熱望セル朝鮮人李周會ニ報知スベキ事ヲ托シ且大院君入闕ノ趣意書ヲ起草シ被告九萬一ニ渡スベキ爲メ被告秀次郎ニ交付シタリ茲ニ於テ被告九萬一ハ直ニ馬ヲ驅リ龍山ニ赴キ被告秀次郎ハ非番ノ巡查ニ大院君入闕ニ付私服ヲ着シ刀劍ヲ用意シ龍山ニ到ルベシト命ジ自身モ亦龍山ニ赴キ被告渡邊鷹次郎成相喜四郎小田俊丸木脇祐則境益太郎ハ被告秀次郎ノ命ニ依リ各龍山ニ赴キ被告横尾勇太郎ハ同所ニテ之ニ加ハリ被告顯藏ハ李周會ニ面會シ今夜大院君入闕アルベシト告ゲ彼ガ數名ノ朝鮮人ヲ糾合シ孔德里ニ到ルヲ見届ケ直ニ龍山ニ赴キ被告重元モ亦被告順見ト共ニ龍山ニ赴キ被告謙藏重章ノ兩

人ハ被告梧樓ノ教唆ニ應ジ王后陛下ヲ殺害セント決意シテ同志者ノ招集ニ盡力シ、被告平山岩彦佐々正之松村辰喜佐々木正牛島英雄小早川秀雄宮住勇喜佐藤敬太澤村雅夫片野猛雄藤勝顯廣田止善菊池謙讓吉田友吉中村楯雄難波春吉寺崎泰吉家入嘉吉田中賢道隈部米吉月茂光山田烈盛佐瀬熊鐵澁谷加藤次等ハ大院君ノ入闕ニ付三浦公使ノ命ニ依リ被告謙藏重章ガ其護衛者ヲ募ル由ヲ聞キ之ニ同意シ其内被告岩彦外十數名ハ被告謙藏重章等ヨリ王后陛下ヲ殺害スベキ被告梧樓ノ教唆ヲ傳ヘラレ各殺意ヲ決シ其他右等ノ事實ヲ知ラズ一時ノ好奇心ニ驅ラレ附和セシモノニ至ルマデ各兇器ヲ携ヘ被告重章並ニ被告光以下三名ノ外ハ亦被告謙藏ト共ニ龍山ニ赴キタリ又被告柳之助ハ仁川ニ在テ時機切迫セリトノ電報ニ接シ即時出發歸京ノ途次同日夜半ノ頃麻浦ニ於テ被告九萬一龍山ニ待チ受ケノ報知ヲ得タルニヨリ直ニ同所ニ立寄り前記ノ者共ト相會シ被告九萬一ヨリ梧樓ノ書面入闕趣意書ノ草案等ヲ受取り二三者ト入城ノ方法等ヲ協議シ然ル後一同ハ柳之助ヲ總指揮者トシ孔德里ニ至リ李周會ノ一行ト共ニ翌八日午前三時頃大院君ノ轎輿ヲ擁シテ出發シタリ而シテ被告柳之助ハ其際表門前ニ一同ヲ集メ入城ノ上狐ハ臨機處分スベシト號令シ以テ王后陛下殺害ノ事ヲ教唆シ未ダ其事實ヲ知ラザリシ被告益太郎外數名ヲシ



テ殺意ヲ決セシセメ、夫レヨリ京城ニ向ヒ徐々前進シ西大門外ニ於テ訓練隊ニ出逢ヒ姑ク守備隊ノ來ルヲ待チ同所ヨリ訓練隊ヲ前衛トシ王城ニ急進スル途中被告重章光烈盛熊鐵加藤次モ相加ハリ、又被告蓮本泰丸大浦茂彦ハ馬屋原務本ヨリ通辯ノ爲メ訓練隊監視ノ陸軍士官ニ隨行ヲ委囑セラレ亦此一行ニ加ハリ、同日拂曉ノ頃光化門ヨリ一同王城内ニ入り直ニ後宮マデ抵リタル等ノ事實アリト雖モ前記ノ被告人中其犯罪ヲ實行シタルモノト認ムベキ證據十分ナラズ、又被告平山岩彦ガ右入城ノ際乾清宮ニ於テ宮内府大臣李耕植ヲ殺害シタリトノ事モ亦其證據十分ナラズ。被告柴四郎大崎正吉武田範治前田俊藏平山勝熊白石由太郎ハ本案被告事件ニ關係セリト認ムベキ證據十分ナラズ。

以上ノ理由ヲ以テ刑事訴訟法第六十五條ニ從ヒ各被告人總テ免訴シ、且ツ被告三浦梧樓杉村濟岡本柳之助安達謙藏國友重章寺崎泰吉平山岩彦中村楯雄藤勝顯家入喜吉木脇祐則境益太郎ハ各放免ス、

但シ押收シタル書類物件ハ各其所有者ニ還付ス

明治二十九年一月二十日、

廣島地方裁判所ニ於テ

豫審判事

吉岡美秀印

裁判所書記

田村義治印

此始末書ヲ一閱スルニ本ト謀殺及兇徒聚衆ト云フ名義ノ下ニ取調ラレタルモノナレバ其證據推斷ハ殺害ノ一邊ニ偏シ事件ノ本體ヲ失フニ似タリ、是ハ法廷ノ調書トシテハ然ルベキモ歴史トシテハ誤ヲ千古ニ傳フル恐アリ。

該事件ヲ企テタル唯一ノ目的ハ宮中ニ於ケル魯國黨其首領ハ無論王妃ト認メタリヲ抑制シテ日本黨ノ勢力ヲ恢復セントスルニ在リ、其手段トシテハ訓練隊ノ力ニ依リ大院君ヲ入闕セシメテ王妃其他ノ魯國黨ヲ抑制シ内閣内閣ハ金宏集其他改革黨ヲ以テ組織セラレタリヲシテ正當ニ政事ヲ行フヲ得セシメントセリ、而シテ殺害ノ事ハ全ク之ニ附帶シテ興リシモノニテ主要ナル目的ニアラズ其結果ハ不幸ニシテ殺害ヲ目的トスルガ如キニ至リシハ大勢ニ驅ラレテ之ニ赴キタルニ過ギズ、假リニ教唆者アリトシテモ誠ニ隱微ノ間ニ發セシモノト想像セラレタリ、初三浦杉村岡本ノ三人兩度ノ會合ニ嘗テ殺害ノ事ヲ話頭ニ出シタル事ナク又事件ニ關係シタル四十餘名ノ内初メヨリ殺害



ノ事ヲ關知セザルモノ多シ、余ハ某々ハ之ヲ關知シ某々ハ關知セザリシトノ事ヲ今日之ヲ明言スルハ困難ナルモ然レドモ其人々ノ系統ニ因テ具サニ取調ブルトキハ略推斷ヲ下スヲ得ベシ。

殺害ハ主要ノ目的ニアラザリシ事ハ左ノ事實ニ因テ推測シ得ベシ。

一、當初ノ計畫ハ訓練隊ト朝鮮壯士ノミヲ以テ大院君ノ入闕ヲ遂ゲシメントノ考ナリシニ訓練隊ハ八百人程ニシテ宮中ニハ七百七百人程ノ侍衛隊アリ、訓練隊ノ精練ハ遙ニ侍衛隊ノ上ニ在リト雖モ攻守ノ勢異ナレバ勝敗ノ數モ亦計ルベカラズ、故ニ當初最モ掛念シタル所ハ無事ニ入闕ノ目的ヲ達スルヤ如何ニ在テ念慮ノ殺害等ノ事ニ及ブベキ餘地ナカリキ。

二、若シ初メヨリ我兵隊並壯士ヲ使用シテ王妃ヲ殺害セントノ計畫ナラバ大院君ヲ引出スノ必要ナシ、大院君モ亦反覆常ナク實ニ厄介物タル事ハ去年英國ニ依頼シテ日本ヲ斥ケントシタル陰謀ニ付テモ證スベシ、唯其害王妃程ニ甚シカラザレバ毒ヲ以テ毒ヲ制セントノ相談ニテ同君ヲ引出ス事ト爲レリ、故ニ同君ヲ引出スニ付初メノ考ハ全ク宮中ニ於テ王妃ヲ始メ魯國黨ヲ抑制セシメントノ目的ニ外ナラズ、大院君ガ入闕ノ後王妃ヲ如何ニ抑制スルヤハ一ニ同君ノ方寸ニ打任セ當

初我念慮ハ全ク茲ニ及バザリシ。

三、三浦杉村岡本ノ會合ハ唯二回ニシテ初メハ岡本ヲ派シテ大院君ノ意中ヲ慥メシメ同君果シテ立タントスル意ナラバ密約要項ニ同意セシメ且ツ入闕機會ニ付略打合セテ爲サシメタルニ過ギズ、次ノ會合ハ岡本ノ復命ヲ聽キ事ヲ舉グル時機ニ付略打合セテ爲シタルニ過ギズ、此時先ヅ十日ト假定シ岡本楠瀬ヲ歸國ト稱シテ仁川ニ下ラシメ其間ニ京城ニ於テ訓練隊及朝鮮壯士ヲ操縱スル手續ヲ定メントノ考ナリシ、故ニ三人會合ノ際言ノ王妃ニ及ブベキ機會ナカリキ。

四、三人最後ノ會合ハ五日ノ夜ニシテ六日朝ニ杉村ハ金總理ヲ訪ヒ同日趙義淵ヲ訪ヒ(權滌鎮モ坐ニ在リ)七日朝再ビ金總理ヲ訪ヒ又金外部ヲ訪ヒ歸館シタル處安馴壽來館シテ訓練隊解散ノ内意ヲ三浦ニ傳居タリシ其時ハ十一時前後ナリ、其後安馴壽ハ杉村ト別室ニテ會談シテ別レタルハ十二時過ナリ、是時三浦ハ禹範善ト對話中ナル故ニ杉村ハ馬屋原ニ托シテ舉事ノ期ヲ早メザルベカラザル旨ヲ三浦ニ傳ヘシメ歸宅晝餐ヲ了ヘテ再ビ公使館ニ到リ三浦ニ面會シタルハ一時過ギナリキ、然レドモ在仁川岡本トノ打合セ相届カザル已上ハ萬事ニ着手スル能ハズ、故ニ仁川領事館ヲ經テ岡本ニ發電シタルモ返電ナク(其日ハ朝鮮大使出發見送並橋口新領事着任出迎等ノ爲メ領事館員ハ



不在ノ爲メ岡本へ電信漸ク四時近キ頃返電ヲ得テ其レヨリ事ニ着手セリ故ニ同事件ハ僅カ四時間程ノ短時間ニ遽シク計畫サレタルモノナリ。而シテ其計畫ノ概略左ノ如シ。

岡本ヲシテ七日午後十二時遅クトモ翌午前一時マデニ麻浦マデ歸着セシメ同所ニ迎トシテ待タシメタル鈴木順見鈴木重元ノ兩人ヲ同伴シ大院君住邸ニ至ラシメ、馬屋原ハ訓練隊附士官ニ同隊ヲ操縦セシメ八日午前二時頃ヨリ其一隊ヲ麻浦ニ派シテ大院君出門ノ護衛ニ充テ其他ハ宮城外ヲ守衛スル裝ヲ爲サシメ大院君ノ來着ヲ待テ共ニ入城セシメントセリ。

其外淺山ヲシテ朝鮮壯士ヲ操縦セシメ麻浦ニ赴キ岡本入邸ノ際故障ナカラシムル様助力ヲ與ヘシメタリ。

當初ノ計畫ハ右ノ通りナレバ巡查及壯士ヲ利用スル事ハ全ク計畫ノ外ナリシ。

五、三浦ガ國友安達ニ諭シテ壯士十人程ニ助力セシメントシタルハ蓋七日ノ午後三四時頃ニシテ夕景ノ頃之ヲ杉村ニ洩シタリ其意ハ朝鮮人ノミニテハ能ク入闕ノ目的ヲ達スルヤ否甚ダ案ゼラル故ニ壯士ヲ使用スル事ト爲シタリト云フ又荻原ガ巡查ヲ引テ事ニ赴キタルハ内命ヲ受ケタリト云ハンヨリハ寧ロ自ラ好ンデ赴

キシ方ナリ是ハ去年七月大院君入闕ノ際ニ彼等ノ中多數ハ同様ノ働ヲ爲シタレバ孰モ再ビ功名ヲ成サントノ考ヲ懷キシナラン堀口ハ初メ大院君トノ交通ヲ開キタルニ拘ハラズ其功ヲ岡本ニ奪ハレタル姿ニテ内心不平ヲ懷居ル様子ヲ認メタルニ因リ三浦杉村相談ノ上堀口ニ用向ヲ拵ヘテ之ヲ與フル事ニセリ其實ハ殊更ニ堀口ヲ麻浦ニ派スル必要ナカリシ。

六、前各項ノ通リトスレバ王妃殺害ノ端ハ孰ニ發シタルヤ甚ダ惑フト雖モ是ハ京城當時ノ事情ニ通ズル者ハ能ク自ラ解クヲ得ベシ是レ全ク暗黙ノ間ニ興リシ事ナラン壯士輩ハ三浦ニ教唆セラレタリト云フハ彼等ハ其責ヲ遁レントシテ三浦ノ教唆ヲ受ケタリト申立テ三浦モ亦罪ヲ壯士輩ニノミ歸スルヲ好マズ自ラ其意ヲ授ケタル如ク申立テタルモノカ又ハ三浦ハ不言ノ間ニ微意ヲ洩シタルモノカ余ハ判斷ニ苦メリ岡本ノ「狐ハ適宜處分セヨ」トノ一言ハ岡本ノ斷ジテ服セザル所ナリ余モ亦同氏ハ斯ル目的ヲ有セザリシモノト信ゼリ萬一斯カル發言アリトセバ蓋シ辭ノ餘波ガ茲ニ及ビシモノニテ此一言ハ主要ナル目的トシテ述べタルモノニアラス當時三浦岡本ノ教唆的言語ナクトモ又三浦岡本ハ縱令之ヲ差止メテモ斯ル大勢ノ壯士輩入闕セバ必ず王妃ニ對シ椿事ヲ惹起シタルニ相違ナシ何ト



ナレバ則當時一般ノ感情ハ王妃ノ所爲ニ對シ非常ニ激憤シ廿七年ノ亂ニ王妃ヲ除カザリシヲ痛ク後悔シ、二十八年七月朴泳孝ノ黨陰ニ除妃ヲ企テ發覺シタル事サヘアレバ一旦事アル場合ニハ其怨ヲ霽サント壯士輩ノ意向ハ王妃ノ一身ニ集マリタルハ避クベカラザル勢ナレバナリ（初メ三浦ノ依囑シタル壯士ハ十名ナリシニ暫時ノ間ニ甲乙相傳ヘテ三十餘名ニ達シ前夜新聞社ニ相集リ議論囂々龍山ニ至リシ頃ハ）假ニ三浦ハ壯士輩ニ殺害ノ意ヲ暗示シタリトスルモ是ハ該事件ノ主要ナル目的ニアラズ大院君入闕ノ際混雜ニ紛レ之ヲ除ケト云フ位ニ過ギザルベシ、故ニ殺害ハ主ナル事件ニ伴ハレ勢ニ乗ジテ興リタル附帶事件タルニ過ギズ。

昭和六年十二月三十日印刷  
昭和七年一月四日發行

(非賣品)

著者 杉村 濬

東京市四谷區須賀町二十四番地

發行者 杉村 陽太郎

東京市京橋區築地二丁目四番地

印刷所 勇喜社印刷所

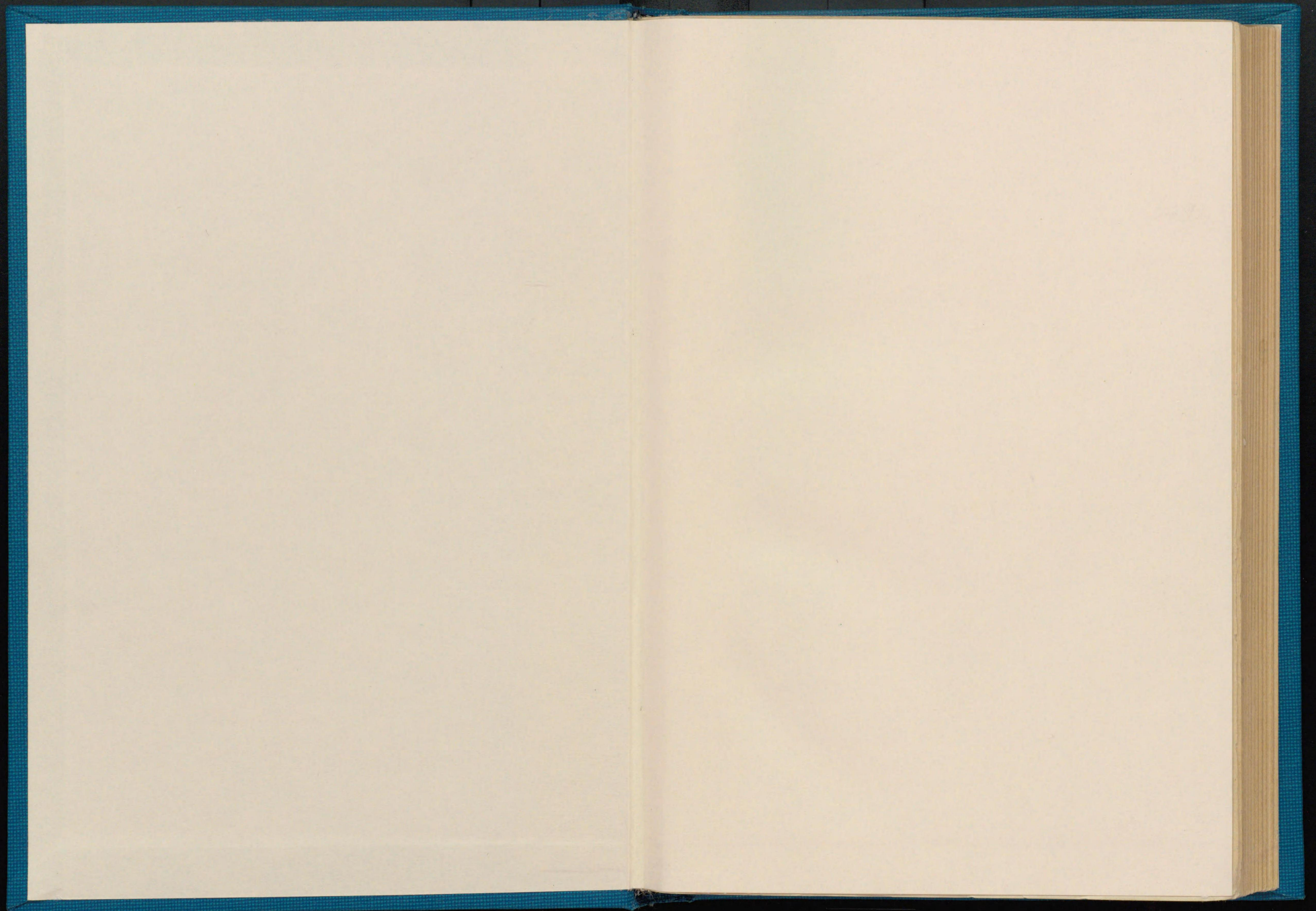
東京市外濠野川町田端五十三番地

印刷者 中西 弘 繁

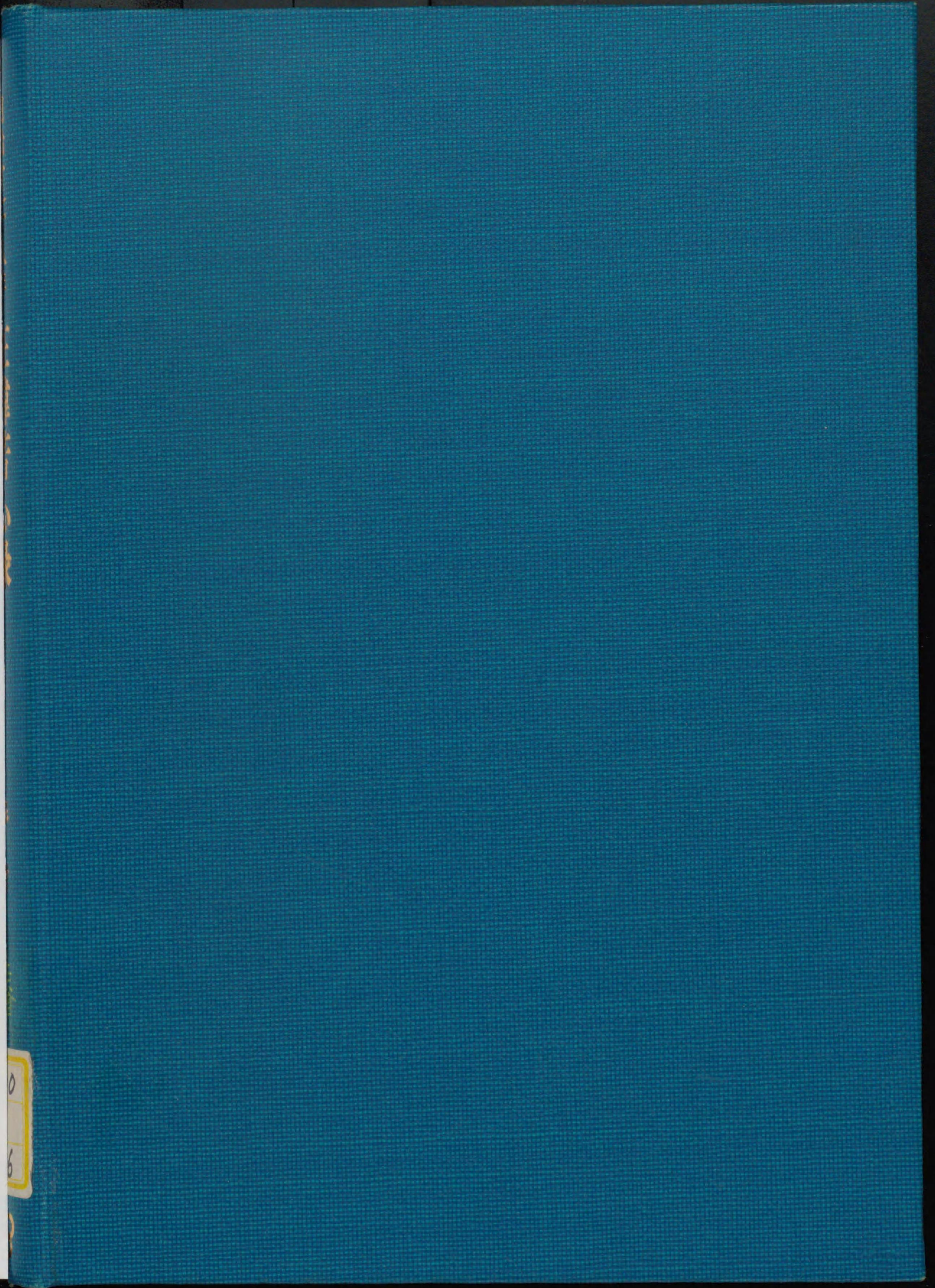


FI 7T-36









0  
6